

2022.12.17 西田読書会「スパゲティの年」(2)
大藤、**岡部**、**佐野**、**奈原**、**楯谷**、**本田**、**田中**、**唐露**、**鹿行武**

〈今後の予定〉
 2023.1.14 レポート締め切り
 2023.1.21 西田読書会「スパゲティの年」(3)

●初読の感想

大藤＝意識の話をつくるのかなあ？
 ・僕の意識の上で何と関係を結んでいるのか？
 ・本当に実際に現実に関係を結んでいるモノ
 〈意識・印象の次元／印象以外の次元〉
 ○現実の電話のベル／空想のベル
 ○嫌いとどう印象／印象というものがなく
 ○現実の Pasta／空想の Pasta＝嘘じゃない

楯谷＝ちゅちゅな感じ

◎「誇り・希望」と言いながらネガティブワードが多い
 ・スパゲティに強迫的に取りつかれている？
 ・病んでいる？
 ・読者の生活体験の level でなく、鬱状態にある？
 ・「1971年」スパゲティ」が何を意味するのか

1971.11 学生運動

◎僕は彼らを悼む＝何を悼むのか？
 ◎悼まれるスパゲティとは何か？
 ◎時間、現実、意識

本田＝

・1971.9.18 カップモードル発売マクドナルドが初オープン
 ・ドイツ・シエパードの様な形に捏ね上げた…」
 ・ドイツシエパードの何か彼が「乗り越えないといけない何か」がここ込められてるのか？
 ・最後に孤独を輸出していた、孤独というものはドイツシエパードの形…悲痛な声…
 ↓彼の人生におおきな影響のある何か？
 ・借りたお金は返さなければならぬ
 (真面目・頑な・生半端な声)

楯谷＝チーンとタイマーの音が「悲痛な音」

・シエパードが逃げないように僕が見張る
 ・成仏する Pasta を悼む悲痛なチーン
 ・影と闇の対峙

佐野＝「午後四時半の影に呑み込まれて」

大藤＝「スパゲティ」と「時の影」を地続きで考えるか、別物で考えるのかどうかが解釈が分かれるか？
 「スパゲティ」(固形物)と「時の影」
本田＝手作りでは生めんになるが、買ってきたものは乾麺になる。

佐野＝「スパゲティ三昧」＝修行のイメージ
 ・スパゲティになりきる
 ・「自分」を「スパゲティ」に分けられない
 ・三昧＝現実と空想を分ける以前
 ○時間に関する単語が多い

・時間をどう生きるかという問題
 ・時間に使われるのでなく、時間の主体になる
 ○1970年何ががあり、1971年に何ががあった
 12月に電話がかかってくる＝何が起る？
 受け答えの中に何かがあるという印象

奈原＝1971年の独特の孤独の内容が電話の女の子の印象が薄い＝4時半にはどこかに消えてしまってる
 ・今の自分の孤独というものを作っているという印象
 誰とも付き合いたくなかった
 付き合えば「ストはかかるが孤独は解消する」

佐野＝彼女はあれからどうなったんだろう？
 現在の僕の立っている現在＝1971年以後
 ・スパゲティを食べている
 両者の関係は、地続きよりも断絶の方を強く感じる

楯谷＝現在の僕は、過去の話をつづける。

奈原＝一九七一年に自分たちが輸出していたものが「孤独だったと知ったら、イタリア人たちはおそらく仰天した」だろう。

・「ミニキーション」の天才であるイタリア人のイメージからすると、それと自分の「コントラスト」
 ・「ロナ禍の許での日本の家族共同体が失われた孤独」

佐野

- 序
 *
 1 一年間の概況
 2 電話
 3 現在

2022.12.17 西田読書会「スパゲティの年」(2)

◎「1971年」を「スパゲティの年」と表現する意味は何か？ 関係つながり、
 ・比喩？ 象徴？ 言葉の機能
 ◎「孤独」は、どうして孤独であるのか？

1971年、スパゲティの年、孤独

- 大藤
- 岡部
- 佐野
- 奈良
- 楯谷
- 本田
- 田中
- 行武
- 唐露
- 鹿

○佐野

・1971年以前の出来事

- ・くだらないドタバタに巻き込まれるのはもうごめんだ
- ・僕はある時心を決めて裏庭に深い穴を掘り、全てをそこに埋めてしまったのだ。もう何人にもそれを掘りかえすことはできない
- ・でもわかってほしい。僕は誰とも関わりあいにならなかったのだ。だからこそ僕はずっとひとりですパゲティを茹でつづけていたのだ。そのドイツ・シェパードが入りそうなほどの大きな鍋の中で
- ・一九七一年に自分たちが輸出していたものが「孤独」だったと知ったら、イタリア人たちはおそらく仰天したことだろう。

○楯谷

・わざわざ「1971年」に限定されている

- ・1980年代初頭に発行
- ・連帯を求めて孤立を恐れず…自己批判
- ・「電話の彼女」と「語り手の僕」

○岡部

- ・昨日の岸田さんの会見、防衛政策の転換
- ・反権力としての連帯
- ・連帯と孤立

○田中

- ・1971年をこういうふうにした1970年がその前にあって、「くだらないドタバタに巻き込まれるのはもうごめんだ」だった。僕はある時心を決めて裏庭に深い穴を掘り、全てをそこに埋めてしまったのだ」**1971年の孤独**
- ・一人で黙々とスパゲティを食べながら、誰かに来てほしいという思い、孤独に耐えられない思い

孤独になった原因

|| 空想が孤独に耐えられない自分の葛藤

・「そういうことになったきっかけは？」

- ・「イツ・シェパードの行水にでも使えそうな巨大なアルミ鍋」に放り込むほどの大きな出来事、何回も何回もスパゲティを作り、打ち消していく程の出来事??

・電話の彼女とどう結びついていくのか?

受話器は氷の柱のように冷たくなった。
それから僕のまわりの何もかもが氷の柱に変わっていった。まるでJ・G・バラードのサイエンス・フィクションの場面のように

・そういうできごとがぼくにあったのか?

「一九七一年に自分たちが輸出していたものが「孤独」だったと知ったら、イタリア人たちはおそらく仰天したことだろう。」(最後の五行の書き方が気になる)

- ・スパゲティ||孤独? 単純につながるか?
- ・イタリアと彼に起こった出来事のつながり?
- ・孤独ということは全体で感じられるが、この小説における「孤独」とは、それ以上の何か? がありそうだ。

○楯谷

・彼女との電話の意味は?

○田中

- ・受話器が氷のようになった。
- ・彼女が僕であり、僕が彼女として受けた対応が過去にあったのではないか。その記憶がよみがえって来た?
- ・最初ベルに聞こえなかったのが、現実の電話の音に。
- ・〇年に起こった出来事が、現在において甦ってきていると読める?

・僕が当事者として彼女のような立場として経験したことが、再び起こってきている。||氷の比喻

○本田

・氷||空想でスパゲティを茹でる

自分で火をつける||生きるために温かさ、ぬくもりを手に入れるため

火をつけてお湯を沸かす||自分で自分を癒すためにスパゲティを食べる…自分で自分の機嫌を取る
床の光のプールが移動||僕の中で何かが変わったのではないか?

死んだ蠅のように(受動) : 自分で天井を見上げた(能動) 彼女からの電話を聞くことでの**変化?**

- ・誰かと二人で食べることもないではなかったが?
- ・思ってもいない偶然で人生が動く
- ・電話によって彼の中で何か動く
- ・ぼくは何かを求めていると思う

「デユラム・セモリナ。/イタリアの平野に育った黄金色の麦。」自分では手に入らない何か、を欲する||折り合いをつける、自分で自分の機嫌を取る、そのあと押し、きっかけとなって、それまでの世界が動いた?

僕の孤独を打破するきっかけになった?
電話がかかってきたことによって何か完成した?
パズルの最後のピースがはまった。機が熟した。
ずっと同じ状態ではいられないと思っていた。

「死んだ蠅」? 人間死んだ蠅ではいられない。

○楯谷

・電話が変化するきっかけになったというのがよく分か

った。スパゲティを茹でて一人で食べることが、どうでもいい人間関係よりずっと大事であるということを知り、他人に話した。それによって、1971年がスパゲティの年であることが「感性」した。それを人に初めて言って、孤独にしてもそれを人に言う事によって完成する。自分を癒す意識：なるほどと思った。

・部屋の内外との対比⇨うちではスパゲティを茹でる、外は寒い世界

・自分を癒す⇨一切合切を穴に埋めて、スパゲティをゆでる温かさ⇨自分を癒す過程にいた主人公

・電話でしゃべることによってそれが完成したのではないか？

○本田

・人に話すことによって孤独が完成したというのは面白いと思った。

○佐野

・彼女からの電話⇨現実の他者と触れ合う最初

・この彼女はただものではない⇨沈黙の間の取り方、僕の内面を見抜いているような応答

・自分を守ろうとしている僕の世界を壊される

・僕が嘘をつくとき彼女が黙り込む⇨氷の柱

・あなたは私のことが嫌いなんですよ？ 僕の内面を抉るような言い方

・スパゲチいは一人で食べるのか、聞く？

○岡部

・彼女の電話は僕の内部からの電話(僕の忘れた過去、色あせた、ゆでて消化してしまうことができない存在⇨永遠に茹でられることなく終わった一束のスパゲティ)

・登場人物は皆スパゲティである

・狡猾についていける人たちがスパゲティで、僕はそれを消化しようとしている

・**スパゲティたちはおそろしく狡猾だったから、**

⇨手のひらを反すように社会に適応していった人達

・何処かついていけない自分がある

彼女からの電話は、彼とかつて一体化していた仲間であった(当時輝いていた)

今、その三人(僕、彼女、彼)が**永遠に茹でられること**なく終わった一束のスパゲティ

今、それまで輝いていた仲間が平凡に見える、

僕は自分と一緒に彼と彼女を

僕(村上春樹)の立ち位置、孤独感、景気よく、大阪万博、反戦運動のカオスの中でさまざま

○佐野

・スパゲティとは？

○岡部

・同時代の人？

○奈原

・スパゲティ⇨イタリア人

・⇨コミュニケーションの天才

・孤独の覚悟を決めて孤独に生きる⇨本田、楯谷に賛成

・人間は孤独に生きるという覚悟を決めた、それ故にコミュニケーションが大切だと決心した

・グローバルゼーションの中でこそ孤独の覚悟を決めた人間こそが生き抜いていける

・「借りた金は返さなければならぬ」⇨僕の覚悟

・連帯と孤独の関係

・彼女は僕の内面だ⇨僕は電話で嘘をついている

そのうしろめたさの表現⇨僕自身の内面の追跡(妄想)

○大藤

・電話(現実が起こったこと)の意味

・電話通して、人間は関わらないというかわり方をしていることを感じたのか？ 関係を断ち切っているように見える、彼女は困る、然し関わっていることになる、

彼女がお金を返してもらえないで困るといふ結果を導くことになる、僕が現実には生きていて限り沈黙することもまた、それが僕に変化をもたらした内実

・結末の五行

・孤独になろうとすると関係が生じるし、つながろうとしたら、逆に孤独を生んでしまう、逆説の面白さを感じた。

○鹿

・ノックの話 カノジョとの電話による空想

・全部幻想ですと最初読んだが、空想と現実とは区別できない。

・区別できないことと僕の孤独は関係があると思う。

・スパゲティを茹でる時、すごく匂い等想像力豊か。

・一人でスパゲティを食べる時にノックの音がした⇨僕は訪問者を確信している

・彼女との電話は、現実と幻想がぶつかって、組み合わせられて表れた部分。

・電話で僕は自分の中の孤独を初めて意識した。

・スパゲティを茹でることは、過去の記憶の抹殺しよう(⇨現在への集中)とおもっても失敗した。

・現在に集中して入れ場茹でられたはずだが、それに失敗した。

川の流れのように一九七一年という時の斜面を下り、
そして消えていった。
僕は彼らを悼む。

永遠に茹でられることなく終わった一束のスパゲティ

こころで考えることは悲154-170。

あの時、彼女に何もかも教えてやるべきだったのかも
しれない、と今では少し後悔している

僕にとつてすごく衝撃的な出来事が起こったことから、
1971年こそスパゲティを茹でることは、僕にとつて「自

己防衛」

- ・彼女からの電話は、僕の安定した状態をやぶった。
- ・記憶の断片

○佐野

- ・僕はぎりぎりのところに追い詰められていた。
- ・他者との関わりのある場所へ出て行った。
- ・語り手としての「僕」
- ・他者との出会いを通じてなんらかの変容があったと考
える。

スパゲティの年に

村上春樹

147

一九七一年、それはスパゲティの年であった。

一九七一年、僕は生きるためにスパゲティを茹でつづけ、スパゲティを茹でるために生きつづけた。アルミ鍋から立ちのぼる蒸気こそが僕の誇りであり、ソースパンの中でグツグツと音を立てるトマト・ソースこそが僕の希望であった。

僕は厨房用品の専門店に行つてドイツ・シェパードの行水にでも使えそうな巨大なアルミ鍋を手に入れ、クッキング・タイマーを買い、外国人向けのスーパー・マーケットを巡つて奇妙な名前の調味料を揃え洋書屋でスパゲティの専門書をみつけ、一ダース単位でトマトを買つた。僕はありとあらゆる種類のパスタを買い込み、ありとあらゆる種類のソースを作つた。にんにくや玉ねぎやサラダ・オイルや何やかやの匂いは細かい粒子となつて空中に飛び散り、渾然一体となつて僕の暮らしていた狭い一間の部屋の隅々へと吸い込まれていった。床にも天井にも壁にも洋服にも本にもレコード・ジャケットにも、古い手紙の束にも、それはしみついた。なんだか古代ローマの下水道のような匂いだった。

紀元一九七一年、スパゲティの年の出来事である。

148

*

基本的には僕は一人でスパゲティを茹で、一人でスパゲティを食べた。何かの折に誰かと二人で食べることもないではなかったが、でも一人で食べる方がずっと好きだった。その頃の僕にはスパゲティとはそもそも一人で食べるべき料理であるように思えた。どうしてそんなふうにしたのか、理由はよくわからない。

スパゲティにはいつも紅茶を飲んだ。サラダも作つた。だいたいはレタスと胡瓜を混ぜただけのかんたんなサラダだった。どちらも量だけはたっぷりあった。それらをテーブルにきちんと並べ、新聞を横目で睨みながらゆつくり時間をかけて僕は一人でスパゲティを食べた。日曜日から土曜日までスパゲティの日々がつづき、それが終わると新しい日曜日から新しいスパゲティの日々が始まつた。

一人でスパゲティを食べているとよく、今にもドアにノックの音がして誰かが部屋の中に入って来るんじゃないかという気がした。雨の午後はとくにそうだった。僕の部屋を訪れようとする人物はそのたびに違つていった。ある時は見知らぬ人物であり、ある時は見覚えのある人物だった。ある時は高校時代に一度だけデートしたことのある足の細い女の子であり、ある時は何年前の僕自身であり、ある時はジェニファー・ジョーンズを連れたウィリアム・ホールデンであつたりした。

ウィリアム・ホールデン？

しかし、彼らは誰ひとりとして部屋に入つてはこなかった。彼らはいかにも記憶の切れ端らしく、部屋の前をうろろろするだけで、結局はノックをすることもなくそ

のままどこかに立ち去っていった。

外は雨だ。

149-

春、夏、秋、と僕はスパゲティを茹でつづけた。それはまるで何かへの復讐のようでもあった。裏切った恋人から送られた古い恋文の束を暖炉の火の中に滑り込ませる孤独な女のように、僕はスパゲティをいつまでも黙々と茹でつづけた。

僕は踏みつけられた時の影をボウルの中でドイツ・シェパードのような形にこねあげ、沸騰した湯の中に放り込み、塩を振った。そして長い箸を手にアルミ鍋の前に立ち、キッチン・タイマーがチーンという悲痛な音を立てるまで一歩もそばを離れなかった。

スパゲティたちはおそろしく狡猾だったから、僕は彼らから目を離すわけにはいかなかった。彼らは今にも鍋の縁をすりりと越えて夜の闇の中に紛れ込んでしまいたいそうだった。熱帯のジャングルが原色の蝶を永劫の時の中に呑み込んでいくように、夜もまたじっと息をひそめてスパゲティたちの到来を待ち受けていたのだ。

スパゲティ・アルラ・パルミジャーナ (spagetti alla parmigiana)
スパゲティ・アルラ・ナポレターナ (spagetti alla napoletana)
スパゲティ・アルラ・プレマトウーラ (spagetti alla parentatura)

スパゲティ・アラ・カルトツチョ (spagetti ala cartoccio)
スパゲティ・アルラ・アリオ・エ・オーリオ (spagetti alla aglio e olio)

スパゲティ・アルラ・カルボナーラ (spagetti alla carbonara)
スパゲティ・デルラ・ピーナ (spagetti alla pina)

150-
そして冷蔵庫の余り物を出鱈目に放り込まれた名もない気の毒なスパゲティたち。

スパゲティたちは蒸気の中に生まれ落ち、川の流れのよらに一九七一年とびつ時の斜面を下り、そして消えていった。

僕は彼らを悼む。

一九七一年のスパゲティたち。

*

三時二十分に電話が鳴った時、僕は畳の床に寝転んでじっと天井を眺めていた。冬の日差しが、ちょうど僕の寝転んだ部分にだけ光のプールを作り上げていた。僕はまるで死んだ蠅のように一九七一年の十二月の光の中に何時間もぼんやりと横たわっていた。

はじめのうち、それは電話のベルには聞こえなかった。空気の層のあいだを遠慮がちにすべり込んできた見覚えのない記憶の断片、そんなところだった。何度か回をかき

ねるうちに、ようやくそれは電話のベルとしての体裁を帯び始め、最後には百パーセントの電話のベルになった。百パーセントの現実の空気を震わせる百パーセントの電話のベルだ。僕は寝転んだままの姿勢で手を伸ばして受話器を取った。

電話の相手は一人の女の子、とても印象が薄くて、午後の四時半にはどこかに消えてしまいそうな女の子だった。彼女は僕の知り合いのかつての恋人だった。その男と、その印象の薄い女の子とは何かの加減で一緒になり、そしてまた何かの加減で別れたのだ。でもその二人が知り合うにあたっては、確かに僕は(気は進まないなりに)ちよつとした役割を果たしたのだ。

「ねえ悪いんだけど、彼が今何処にいるのか教えてくれない？」と彼女は言った。

僕は受話器を眺め、電話のコードをずっと目で追ってみた。コードはちゃんと電話機に接続していた。151-僕は曖昧な返事をした。彼女の声には何かしら不吉な響きがあったし、僕はできることならそういうトラブルに巻き込まれなくなかった。

「だれも教えてくれないのよ」と彼女は冷やりとした声で言った。「みんな知らないふりをするの。でも大事な用事があるのよ。ねえお願い、教えて。あなたには迷惑かけないから。彼は今何処にいるの？」

「本当に知らないんだ。もうずいぶん長い間会ってないしさ」と僕は言った。言っただけでみたものの、それはまるで自分の声には聞こえなかった。僕は本当に長い間その男には会っていなかった。でも僕は彼の住所と電話番号を知っていた。僕は嘘をつくとすぐく変な声になってしまうのだ。

彼女は黙りこんだ。

受話器は氷の柱のように冷たくなった。

それから僕のまわりの何もかもが氷の柱に変わっていった。まるでJ・G・バラードのサイエンス・フィクションの場面のように。

「本当に知らないんだ」と僕はくりかえした。「ずいぶん前に何もいわずにどこかに消えちゃったんだよ」

電話の向う側で彼女が笑った。
「冗談じゃないわよ。それほど気の利いた男じゃないわよ。それくらい私にだってわかるわ。そこらじゅうにわめきちらしたあとじゃなきや、なんにもできない男だもの」

たしかに彼女の言うとおりであった。それほど気の利いた男じゃない。

でも僕には彼の居場所を教えるわけにはいかなかった。僕が教えたとわかれば今度は彼の方が僕に電話をかけてくるだろう。くだらないドタバタに巻き込まれるのはもうごめんだ。僕はある時心を決めて裏庭に深い穴を掘り、全てをそこに埋めてしまったのだ。もう何人にもそれを掘りかえすことはできな。152-

「悪いけど」と僕は言った。

「ねえあなた、私のことが嫌いなんでしょ？」と突然彼女は言った。

「どう答えていいのか僕にはわからなかった。僕は別に彼女のことを嫌いではなかった。そもそも彼女には**印象などというものがなかったのだ。印象のない人間には悪い印象も持てない。**」

「悪いけど」と僕はくりかえした。「今スパゲティを茹でるところなんだ」

「うん？」

「スパゲティを茹でてるんだ」と僕は嘘をついた。どうしてそんな嘘をついてしまったのか、僕にはよくわからない。でもその嘘は僕の心にとてもよく馴染んだ。それはそのときの僕にとっては全然嘘なんかじゃなかったのだ。僕は鍋の中に空想の水を入れ、空想のマッチで空想の火を点けた。

「それで？」と彼女は言った。

僕は沸騰した湯に空想の塩を振り、空想のスパゲティの束をそつとすべりこませ、空想のキッチン・タイマーを十二分にあわせた。

「だから、今ちよつと、手が離せないんだよ。スパゲティが絡んじやうから」

彼女は黙った。

「悪いとは思うけどさ、スパゲティを茹でるのつてすごく微妙なんだよ」

彼女は沈黙した。受話器は僕の手の中で、再び氷点下の坂道を下り始めた。

「だから、あとでもう一度電話してもらえないかな」

「スパゲティを茹でてる最中だからね？」と彼女は言った。

「うん、そうなんだ」 153-

「そのスパゲティは誰かのために作ってるの、それともあなた一人で食べるの？」

「一人で食べる」と僕は言った。

彼女は長いあいだ息を殺していた。それからゆっくりと空気を吸い込んだ。「あなたにはきつとわからないと思うんだけど、でも私、本当に困ってるのよ。今どうしようもないのよ」

「役に立てなくて申しわけないとは思う」と僕は言った。

「お金のこともあるし」

「うん」

「返してほしいのよ」と彼女は言った。「あの人にちよつとした額のお金を貸したの。貸すべきじゃなかったんだけどね。でも貸さないわけにはいかなかったの」僕はしばらく黙って、スパゲティのことを考えていた。「悪いけど」と僕は言った。

「スパゲティを茹でてるからね」

「うん」

彼女は力なく笑った。「さよなら」と彼女は言った。「あなたのスパゲティによるしくね。美味しいといいわね」

「さよなら」と僕も言った。

電話を切った時、床の上の光のプールは何センチか移動していた。僕はその光の中にもう一度身を横たえ、天井を見上げた。

*

僕は思うのだけれど、永遠に茹でられることなく終わった一束のスパゲティについて考えることは悲しい。

あの時、彼女に何もかも教えてやるべきだったのかもいけない、と今では少し後悔している。どうせ相手はたいた男じゃなかったのだから。自分では芸術家のつもりでいる、内容のない空っぽな男だった。口だけが達者で、ほとんど誰にも信用されていなかった。そして彼女は本当にお金に困っていたのだろう。それに、借りた金というのはどういう事情があるうが貸した人間にちゃんと返されるべきものなのだ。

彼女はあれからどうなったんだろう、と僕は時折考える。大抵はスパゲティを食べながら。彼女は電話を切った後、そのまま午後四時半の影に呑み込まれて消えてしまったのだろうか？ もしそうだとしたら、僕にもその責任の一端はあるのだろうか？ でもわかってほしい。僕は誰とも関わりあいにならなくなかったのだ。だからこそ僕はずっとひとりですpageteeを茹でつづけていたのだ。そのドイツ・シェパードが入りそうなほどの大きな鍋の中で。

デュラム・セモリナ。

イタリアの平野に育った黄金色の麦。

一九七一年に自分たちが輸出していたものが孤独だったと知ったら、イタリア人たちはおそらく仰天したことだろう。

スパゲティの年に

村上春樹

147-

一九七一年、それはスパゲティの年であった。一九七一年、僕は生きるためにスパゲティを茹でつづけ、スパゲティを茹でるために生きつづけた。アルミ鍋から立ちのぼる蒸気こそが僕の誇りであり、ソースパンの中でグツグツと音を立てるトマト・ソースこそが僕の希望であった。

僕は厨房用品の専門店に行つてドイツ・シェパードの行水にでも使えそうな巨大なアルミ鍋を手に入れ、クッキング・タイマーを買い、外国人向けのスーパー・マーケットを巡つて奇妙な名前の調味料を揃え洋書屋でスパゲティの専門書を買つて、一ダース単位でトマトを買つた。僕はありとあらゆる種類のパスタを買い込み、ありとあらゆる種類のソースを作つた。にんにくや玉ねぎやサラダ・オイルや何やかやの匂いは細かい粒子となつて空中に飛び散り、渾然一体となつて僕の暮らしていた狭い一間の部屋の隅々へと吸い込まれていった。床にも天井にも壁にも洋服にも本にもレコード・ジャケツにも、古い手紙の束にも、それはしみついた。なんだか古代ローマの下水道のような匂いだった。

紀元一九七一年、スパゲティの年の出来事である。

148-

*

基本的には僕は一人でスパゲティを茹で、一人でスパゲティを食べた。何かの折に誰かと二人で食べることもないではなかったが、でも一人で食べる方がずっと好きだった。その頃の僕にはスパゲティとはそもそも一人で食べるべき料理であるように思えた。どうしてそんなふうにしたのか、理由はよくわからない。

スパゲティにはいつも紅茶を飲んだ。サラダも作つた。だいたいはレタスと胡瓜を混ぜただけのかんたんなサラダだった。どちらも量だけはたっぷりあった。それらをテーブルにきちんと並べ、新聞を横目で睨みながらゆつくり時間をかけて僕は一人でスパゲティを食べた。日曜日から土曜日までスパゲティの日々がつづき、それが終わると新しい日曜日から新しいスパゲティの日々が始まつた。

一人でスパゲティを食べているとよく、今にもドアにノックの音がして誰かが部屋の中に入って来るんじゃないかという気がした。雨の午後はとくにそうだった。

僕の部屋を訪れようとする人物はそのたびに違つていた。ある時は見知らぬ人物であり、ある時は見覚えのある人物だった。ある時は高校時代に一度だけデートしたことのある足の細い女の子であり、ある時は何年前かの僕自身であり、ある時はジェニファー・ジョーンズを連れたウィリアム・ホールデンであつたりした。

ウィリアム・ホールデン？

しかし、彼らは誰ひとりとして部屋に入つてはこなかった。彼らはいかにも記憶の切れ端らしく、部屋の前を

うろろろするだけで、結局はノックをすることもなくそのままどこかに立ち去つていった。

外は雨だ。

149

春、夏、秋、と僕はスパゲティを茹でつづけた。それはまるで何かへの復讐のようでもあつた。裏切つた恋人から送られた古い恋文の束を暖炉の火の中に滑り込ませる孤独な女のように、僕はスパゲティをいつまでも黙々と茹でつづけた。

僕は踏みつけられた時の影をボウルの中でドイツ・シェパードのような形にこねあげ、沸騰した湯の中に放り込み、塩を振つた。そして長い箸を手にアルミ鍋の前に立ち、キッチン・タイマーがチーンという悲痛な音を立てるまで一步もそばを離れなかった。

スパゲティたちはおそろしく狡猾だったから、僕は彼らから目を離すわけにはいかなかった。彼らは今にも鍋の縁をするりと越えて夜の闇の中に紛れ込んでしまひそうだった。熱帯のジャングルが原色の蝶を永劫の時の中に呑み込んでいくように、夜もまたじつと息をひそめてスパゲティたちの到来を待ち受けていたのだ。

スパゲティー・アルラ・パルミジャーナ(spagetti alla parmigiana)

スパゲティー・アルラ・ナポレターナ(spagetti alla napoletana)

スパゲティー・アルラ・プレマトウーラ(spagetti alla premaratura)

スパゲティー・アラ・カルトツチョ(spagetti alla cartoccio)

スパゲティー・アルラ・アリオ・エ・オーリオ(spagetti alla aglio e olio)

スパゲティー・アルラ・カルボナーラ(spagetti alla carbonara)

スパゲティー・デルラ・ピーナ(spagetti alla pina)

150-

そして冷蔵庫の余り物を出鱈目に放り込まれた名もない気の毒なスパゲティたち。

スパゲティーたちは蒸気の中に生まれ落ち、川の流れのように一九七一年という時の斜面を下り、そして消えていった。

僕は彼らを悼む。

一九七一年のスパゲティーたち。

*

三時二十分に電話が鳴つた時、僕は畳の床に寝転んでじつと天井を眺めていた。冬の日差しが、ちょうど僕の寝転んだ部分にだけ光のプールを作り上げていた。僕はまるで死んだ蝶のように一九七一年の十二月の光の中に何時間もぼんやりと横たわつていた。

はじめのうち、それは電話のベルには聞こえなかった。空気の層のあいだを遠慮がちにすべり込んできた見覚えのない記憶の断片、そんなところだった。何度か回をかかさぬうちに、ようやくそれは電話のベルとしての体裁

を帯び始め、最後には百パーセントの電話のベルになった。百パーセントの現実の空気を震わせる百パーセントの電話のベルだ。僕は寝転んだままの姿勢で手を伸ばして受話器を取った。

電話の相手は一人の女の子、とても印象が薄くて、午後の四時半にはどこかに消えてしまいそうな女の子だった。彼女は僕の知り合いのかつての恋人だった。その男と、その印象の薄い女の子とは何かの加減で一緒になり、そしてまた何かの加減で別れたのだ。でもその二人が知り合うにあたっては、確かに僕は(気は進まないなりに)ちよつとした役割を果たしたのだ。

「ねえ悪いんだけど、彼が今何処にいるのか教えてくれない？」と彼女は言った。

僕は受話器を眺め、電話のコードをずっと目で追ってみた。コードはちゃんと電話機に接続していた。**151-**僕は曖昧な返事をした。彼女の声には何かしら不吉な響きがあったし、僕はできることならそういうトラブルに巻き込まれたくなかった。

「だれも教えてくれないのよ」と彼女は冷やりとした声で言った。「みんな知らないふりをするの。でも大事な用事があるのよ。ねえお願い、教えて。あなたには迷惑かけないから。彼は今何処にいるの？」

「本当に知らないんだ。もうずいぶん長い間会ってないしさ」と僕は言った。言っただけのもの、それはまるで自分の声には聞こえなかった。僕は本当に長い間その男には会っていなかった。でも僕は彼の住所と電話番号を知っていた。僕は嘘をつくとすぐく変な声になってしまうのだ。

彼女は黙りこんだ。

受話器は氷の柱のように冷たくなった。それから僕のまわりの何もかもが氷の柱に変わっていった。まるでJ・G・バラードのサイエンス・フィクションの場面のよう。

「本当に知らないんだ」と僕はくりかえした。「ずいぶん前に何もいわずにどこかに消えちゃったんだよ」

電話の向う側で彼女が笑った。
「冗談じゃないわよ。それほど気の利いた男じゃないわよ。それくらい私にだってわかるわ。そこらじゅうにわめきちらしたあとじゃなきゃ、なんにもできない男だもの」

たしかに彼女の言うとおりだった。それほど気の利いた男じゃない。

でも僕には彼の居場所を教えるわけにはいかなかった。僕が教えたとわかれば今度は彼の方が僕に電話をかけてくるだろう。くだ「らないドタバタに巻き込まれるのはもうごめんだ。僕はある時心を決めて裏庭に深い穴を掘り、全てをそこに埋めてしまったのだ。もう何人にもそれを掘りかえずことはできな。 **152-**

「悪いけど」と僕は言った。

「ねえあなた、私のことが嫌いなんでしょ？」と突然彼女は言った。

どう答えていいのか僕にはわからなかった。僕は別に

彼女のことを嫌いではなかった。そもそも彼女には印象などというものがなかったのだ。印象のない人間には悪い印象も持てない。

「悪いけど」と僕はくりかえした。「今スパゲティを茹でてるどころなんだ」

「うん？」

「スパゲティを茹でてるんだ」と僕は嘘をついた。どうしてそんな嘘をついてしまったのか、僕にはよくわからない。でもその嘘は僕の心にとてもよく馴染んだ。それはそのときの僕にとっては全然嘘なんかじゃなかったのだ。

僕は鍋の中に空想の水を入れ、空想のマッチで空想の火を点けた。

「それで？」と彼女は言った。

僕は沸騰した湯に空想の塩を振り、空想のスパゲティの束をそつとすべりこませ、空想のキッチン・タイマーを十二分にあわせた。

「だから、今ちよつと、手が離せないんだよ。スパゲティが絡んじやうから」

彼女は黙った。

「悪いとは思うけどさ、スパゲティを茹でるのつてすくく微妙なんだよ」

彼女は沈黙した。受話器は僕の手の中で、再び氷点下の坂道を下り始めた。

「だから、あとでもう一度電話してもらえないかな」

「スパゲティを茹でてる最中だからね？」と彼女は言った。

「うん、そうなんだ」 **153-**

「そのスパゲティは誰かのために作ってるの、それともあなた一人で食べるの？」

「一人で食べる」と僕は言った。

彼女は長いあいだ息を殺していた。それからゆつくりと空気を吸い込んだ。「あなたにはきつとわからないと思うんだけど、でも私、本当に困ってるのよ。今どうしようもないのよ」

「役に立てなくて申しわけないとは思う」と僕は言った。

「お金のこともあるし」

「うん」

「返してほしいのよ」と彼女は言った。「あの人にちよつとした額のお金を貸したの。貸すべきじゃなかったんだけどね。でも貸さないわけにはいかなかったの」僕はしばらく黙って、スパゲティのことを考えていた。「悪いけど」と僕は言った。

「スパゲティを茹でてるからね」

「うん」

彼女は力なく笑った。「さよなら」と彼女は言った。「あなたのスパゲティによろしくね。美味しいといいわね」

「さよなら」と僕も言った。

電話を切った時、床の上の光のプールは何センチか移動していた。僕はその光の中にもう一度身を横たえ、天井を見上げた。

*

僕は思うのだけれど、永遠に茹でられることなく終わった一束のスパゲティーについて考えることは悲しい。

154

あの時、彼女に何もかも教えてやるべきだったのかもいけない、と今では少し後悔している。どうせ相手はたいした男じゃなかったのだから。自分では芸術家のつもりでいる、内容のない空っぽな男だった。口だけが達者で、ほとんど誰にも信用されていなかった。そして彼女は本当にお金に困っていたのだろう。それに、借りた金というのはどういう事情があるうが貸した人間にちゃんと返されるべきものなのだ。

彼女はあれからどうなったんだろう、と僕は時折考える。大抵はスパゲティーを食べながら。彼女は電話を切った後、そのまま午後四時半の影に呑み込まれて消えてしまったのだろうか？ もしそうだとしたら、僕にもその責任の一端はあるのだろうか？ でもわかってほしい。僕は誰とも関わりあいになりたくなかったのだ。だからこそ僕はずっとひとりでスパゲティーを茹でつづけていたのだ。そのドイツ・シェパードが入りそうなほどの大きな鍋の中で。

デュラム・セモリナ。

イタリアの平野に育った黄金色の麦。

一九七一年に自分たちが輸出していたものが「孤独」だったと知ったら、イタリア人たちはおそらく仰天したことだろう。

『村上春樹全作品版』 スパゲティーの年に

村上春樹

147

一九七一年、それはスパゲティーの年であった。

一九七一年、僕は生きるためにスパゲティーを茹でつづけ、スパゲティーを茹でるために生きつづけた。アルミ鍋から立ちのぼる蒸気こそが僕の誇りであり、ソースパンの中でグツグツと音を立てるトマト・ソースこそが僕の希望であった。

僕は厨房用品の専門店に行つてドイツ・シェパードの行水にでも使えそうな巨大なアルミ鍋を手に入れ、クッキング・タイマーを買い、外国人向けのスーパーマーケットを巡つて奇妙な名前の調味料を揃え洋書屋でスパゲティーの専門書を買つけ、一ダース単位でトマトを買つた。僕はありとあらゆる種類のパスタを買い込み、ありとあらゆる種類のソースを作つた。にんにくや玉ねぎやサラダ・オイルや何やかやの匂いは細かい粒子となつて空中に飛び散り、渾然一体となつて僕の暮らしていた狭い木壘一間の部屋の隅々へと吸い込まれていった。床にも天井にも壁にも洋服にも本にもレコード・ジャケットにも、古い手紙の束にも、それはしみついた。それはなんだか古代ローマの下水道のような匂いだった。

紀元一九七一年、スパゲティーの年の出来事である。

148

*

基本的には僕は一人でスパゲティーを茹で、一人でスパゲティーを食べた。何かの折りに誰かと二人で食べることもないではなかったが、でも一人で食べる方がずっと好きだった。その頃の僕にはスパゲティーとはそもそも一人で食べるべき料理であるように思えた。どうしてそんなふうにしたのか、理由はよくわからない。

スパゲティーにはいつも紅茶を飲んだ。サラダも作つた。ポットに入れた主杯ぶんの紅茶と、だいたいレタスと胡瓜を混ぜただけのkantanaサラダだった。どちらも量だけはたっぷりあった。それらをテーブルにきちんと並べ、新聞を横目で睨みながらゆつくり時間をかけて僕は一人でスパゲティーを食べた。日曜日から土曜日までスパゲティーの日々がつづき、それが終わると新しい日曜日から新しいスパゲティーの日々が始まった。

一人でスパゲティーを食べているとよく、今にもドアにノックの音がして誰かが部屋の中に入って来るんじゃないかという気がした。雨の午後はとくにそうだった。

僕の部屋を訪れようとする人物はそのたびに違っていた。ある時は見知らぬ人物であり、ある時は見覚えのある人物だった。ある時は高校時代に一度だけデートしたことのあるおもしろい足の細い女の子であり、ある時は何年か前の僕自身であり、ある時はジェニファー・ジョーンズを連れたウィリアム・ホールデンであつたりした。ウィリアム・ホールデン？

しかし、彼らは誰ひとりとして部屋に入つてはこなかった。彼らは決めかねるよまじいかに記憶の切れ端ら

しく、部屋の前をうろろするだけで、結局はノックをすることもなくそのままどこかに立ち去っていった。外は雨だ。

149-

春、夏、秋、と僕はスパゲティを茹でつづけた。それはまるで何かへの復讐のようでもあった。裏切った恋人から送られた古い恋文の束を暖炉の火の中に滑り込ませる孤独な女のように、僕はスパゲティをいつまでも黙々と茹でつづけた。

僕は踏みつけられた時の影をボウルの中でドイツ・シエパードのような形にこねあげ、沸騰した湯の中に放り込み、塩を振った。そして長い箸を手にアルミ鍋の前に立ち、キッチン・タイマーがチーンという悲痛な音を立てるまで一步もそばを離れなかった。

スパゲティたちはおそろしく狡猾だったから、僕は彼らから目を離すわけにはいかなかった。彼らは今にも鍋の縁をすりと越えて夜の闇の中に紛れ込んでしまっそうだった。熱帯のジャングルが原色の蝶を永劫の時の中に呑み込んでいくように、夜もまたじっと息をひそめてスパゲティたちの到来を待ち受けていたのだ。

スパゲティー・アルラ・パルミジャーナ (Spaghetti alla parmigiana)

スパゲティー・アルラ・ナポレターナ (Spaghetti alla napoletana)

スパゲティー・アルラ・プレマトウーラ (Spagetti alla parentura)

スパゲティー・アラ・カルトッチョ (Spagetti alla cartoccio)

スパゲティー・アルラ・アリオ・エ・オーリオ (Spagetti alla aglio e olio)

スパゲティー・アルラ・カルボナーラ (Spagetti alla carbonara)

スパゲティー・デルラ・ピーナ (Spagetti alla pina)

150-

そして冷蔵庫の余り物を出鱈目に放り込まれた悲劇的本名もない**気の毒な**スパゲティたち。

スパゲティーたちは蒸気の中に生まれ落ち、川の流れのように一九七一年という時の斜面を下り、そして消えていった。

僕は彼らを悼む。

一九七一年のスパゲティーたち。

*

三時二十分に電話が鳴った時、僕は畳の床に寝転んでじっと天井を眺めていた。冬の日差しが、ちょうど僕の寝転んだ部分にだけ光のプールを作り上げていた。僕はまるで死んだ蠅のように一九七一年の十二月の光の中に何時間もぼんやりと横たわっていた。

はじめのうち、それは電話のベルには聞こえなかった。空気の層のあいだを遠慮がちにすべり込んできた見覚えのない記憶の断片、そんなところだった。何度か回をかかぬるうちに、ようやくそれは電話のベルとしての体裁

を帯び始め、最後には百パーセントの電話のベルになった。百パーセントの現実の空気を震わせる百パーセントの電話のベルだ。僕は寝転んだままの姿勢で手を伸ばして受話器を取った。

電話の相手は一人の女の子、とても印象が薄くて、午後の四時半にはどこかに消えてしまいそうな女の子だった。彼女は僕の知り合いのかつての恋人だった。**たいた知り合いではない。どこかで余えは挨拶するといわれた程度のものだ。もともとらしく見えぬ奇妙な理由が何年前に彼と彼女を恋人同士にし、同じような理由が何年前に二人のあいだを引き裂いていた。**その男と、その印象の薄い女の子とは何かの加減で一緒になり、そしてまた何かの加減で別れたのだ。でもその二人が知り合うにあたっては、確かに僕は**(気は進まないなりに)**ちょっととした役割を果たしたのだ。

「ねえ悪いんだけど、彼が今何処にいるのか教えてくれない？」と彼女は言った。

僕は受話器を眺め、電話のコードをずっと目で追ってみた。コードはちゃんと**電話機に**接続して**いた。**151-1何故僕に聞くんだ？僕は曖昧な返事をした。彼女の声には何かしら不吉な響きがあったし、僕はできることならそういうトラブルに巻き込まれたくなかった。

「だれも教えてくれないのよ」と彼女は冷やりとした声で言った。「みんな知らないふりをするの。でも大事な用事があるのよ。ねえお願い、教えて。あなたには迷惑かけないから。彼は今何処にいるの？」

「本当に知らないんだ。もうずいぶん長い間会ってないし」と僕は言った。言っではみたものの、それはまるで自分の声には聞こえなかった。僕は本当に長い間その男には会っていなかった。でも僕は彼の住所と電話番号を知っていた。僕は嘘をつくとすぐく変な声になってしまふのだ。

彼女は黙りこんだ。

受話器は氷の柱のように冷たくなった。

それから僕のまわりの何もかもが氷の柱に変わっていった。まるでJ・G・バラードのサイエンス・フィクションの場面のよう。

「本当に知らないんだ」と僕はくりかえした。「ずいぶん前に何もいわずにどこかに消えちゃったんだよ」

電話の向う側で彼女が笑った。

「冗談じゃないわよ。それほど気の利いた男じゃないわよ。それくらい私にだってわかるわ。そこらじゅうにわめきちらしたあとじゃなきゃ、なんにもできない男だもの」

たしかに彼女の言うとおりであった。それほど気の利いた男じゃない。

でも僕には彼の居場所を教えるわけにはいかなかった。僕が教えたとわかれば今度は彼の方が僕に電話をかけてくるだろう。くだ「らない」ドタバタに巻き込まれるのはもうごめんだ。僕は**ある時心を決めて裏庭に深い穴を掘り、全てをそこに埋めてしまったのだ。**もう何人にもそれを掘りかえすことはできない。152-

「悪いけど」と僕は言った。
「ねえあなた、私のことが嫌いなんですよ？」と突然彼女は言った。

どう答えていいのか僕にはわからなかった。僕は別に彼女のことを嫌いではなかった。そもそも彼女には印象などというものがなかったのだ。印象のない人間には悪い印象も持てない。

「悪いけど」と僕はくりかえした。「今スパゲティを茹でるところなんだ」

「うん？」
「スパゲティを茹でてるんだ」と僕は嘘をついた。どうしてそんな嘘をついてしまったのか、僕にはよくわからない。でもその嘘は僕の心にとてもよく馴染んだ。それはそのときの僕にとっては全然嘘なんかじゃなかったのだ。

僕は鍋の中に空想の水を入れ、空想のマッチで空想の火を点けた。

「それで？」と彼女は言った。

僕は沸騰した湯に空想の塩を振り、空想のスパゲティの束をそっとすべりこませ、空想の塩をふり、空想のキッチン・タイマーを十五二分にあわせた。

「だから、今ちよつと、手が離せないんだよ。スパゲティが絡んじやうから」

彼女は黙った。

「悪いとは思っけどさ、スパゲティを茹でるのってすごく微妙な料理なんだよ」

彼女は沈黙した。受話器は僕の手の中で、再び氷点下の坂道を下り始めた。

「だから、あとでもう一度電話してもらえないかな」

僕はあわててそりつけ加えた。

「スパゲティを茹でてる最中だからね？」と彼女は言った。

「うん、そうなんだ」 153

「そのスパゲティは誰かのために作ってるの、それともあなた一人で食べるの？」

「そりだよ一人で食べる」と僕は言った。

彼女は長いあいだ息を殺していた。それからゆっくりと空気を吸い込んだ。たゆ息をついた。「あなたにはきくとわからないと思うんだけど、でも私、本当に困ってるのよ。今どうしようもないのよ」

「役に立てなくて申しわけないとは思っ」と僕は言った。

「お金のこともあるし」

「うん」

「返してほしいのよ」と彼女は言った。「あの人にちよつとした額のお金を貸したの。貸すべきじゃなかったんだけどね。でも貸さないわけにはいかなかったの」僕はしばらく黙って、スパゲティのことを考えていた。「悪いけど」と僕は言った。

「スパゲティを茹でてるからね」

「うん」

彼女は力なく笑った。「さよなら」と彼女は言った。「あなたのスパゲティによるしくね。美味しいといいわね」

「さよなら」と僕も言った。

電話を切った時、床の上の光のプールは何センチか移動していた。僕はその光の中にもう一度身を横たえ、天井を見上げた。

*

僕は思うのだけれど、永遠に茹でられることなく終わった一束のスパゲティについて考えることは悲しい。

あの時、彼女に何もかも教えてやるべきだったのかもいけない、と今では少し後悔している。どうせ相手はたいた男じゃなかったのだから。画家気取りで下手な抽象画を描き、自分では芸術家のつもりでいる、内容のない中だけが達者な空っぽな男だった。口だけが達者で、ほとんど誰にも信用されていなかった。そしてそれには彼女は本当にお金を返してほしかつたのだから。に困っていたのだろう。それに、借りた金というのはどういう事情があるのが貸した人間にちゃんと返されるべきものなのだ。

彼女はあれからどうなったんだろう、と僕は時折考える。大抵はスパゲティを食べながら。彼女は電話を切った後、そのままどろどろいものだから午後四時半の影に呑み込まれて消えてしまったのだろうか？ もしそうだとしたら、僕にもその責任の一端はあるのだろうか？ でもわかかってほしい。僕は誰とも関わりあいになりたくなかったのだ。だからこそ僕はずっとひとりですパゲティを茹でつづけていたのだ。そのドイツ・シェパードが入りそうなほどの大きな鍋の中で。

デュラム・セモリナ。

イタリアの平野に育った黄金色の麦。

一九七一年に自分たちが輸出していたものが「孤独」だったと知ったら、イタリア人たちはおそらく仰天したことだろう。

スパゲティの年に

村上春樹

一九七一年、それはスパゲティの年だった。

一九七一年、僕は生きるためにスパゲティを茹でつづけ、スパゲティを茹でるために生きつづけた。アルミ鍋から立ちのぼる蒸気こそが僕の誇りであり、ソースパンの中でグツグツと音を立てるトマト・ソースこそが僕の希望であった。

ドイツ・シェパードの行水にでも使えそうな巨大なアルミ鍋を手に入れ、クッキング・タイマーを買い、外国人向けのスーパード・マーケットを巡って奇妙な名前の調味料を揃え洋書屋でスパゲティの専門書をみつけ、一ダース単位でトマトを買った。

にんにくや玉ねぎやサラダ・オイルや何かやの匂いは細かい粒子となつて空中に飛び散り、渾然一体となつて六畳一間の部屋の隅々へと吸い込まれていった。それはなんだか古代ローマの下水道のような匂いだった。

紀元一九七一年、スパゲティの年の出来事である。

163

基本的には僕は一人でスパゲティを茹で、一人でスパゲティを食べた。何かの折りに誰かと二人で食べることもないではなかったが、一人で食べる方がずっと好きだった。スパゲティとは一人で食べるべき料理であるような気がした。理由なんてわからない。

スパゲティにはいつも紅茶とサラダが付いた。ポットに入れた三杯ぶんの紅茶と、レタスと胡瓜を混ぜただけのサラダだった。それらをテーブルにきちんと並べ、新聞を横目で睨みながらゆつくり時間をかけて僕は一人でスパゲティを食べた。日曜日から土曜日までスパゲティの日々がつづき、それが終わると新しい日曜日から新しいスパゲティの日々が始まった。

一人でスパゲティを食べていると、今にもドアにノックの音がして誰かが部屋の中に入つて来るような気がした。雨の午後はとくにそうだった。

僕の部屋を訪れようとする人物はそのたびに違っていた。ある時は見知らぬ人物であり、ある時は見覚えのある人物だった。ある時は高校時代に一度だけデートしたことのあるおそろしく足の細い女の子であり、ある時は何年か前の僕自身であり、ある時はジェニファー・ジョーンズを連れたウィリアム・ホール **164** デンであったりした。

ウィリアム・ホールデン？

しかし、彼らは誰ひとりとして部屋に入つてはこなかった。彼らは決めかねるように部屋の前をうろろするだけで、結局はノックもせずどこかに立ち去つていった。

外は雨だ。

春、夏、秋、と僕はスパゲティを茹でつづけた。それはまるで何かへの復讐のようでもあった。裏切った恋

人から送られた古い恋文の束を暖炉の火の中に滑り込ませる孤独な女のように、僕はスパゲティを茹でつづけた。

僕は踏みつけられた時の影をボウルの中でドイツ・シェパードのような形にこねあげ、沸騰した湯の中に放り込み、塩を振った。そして長い箸を手でアルミ鍋の前に立ち、キッチン・タイマーがチーンという悲痛な音を立てるまで一步もそばを離れなかった。

スパゲティたちはおそろしく狡猾だったから、僕は彼らから目を離すわけにはいかなかった。彼らは今にも鍋の縁を滑り抜け、夜の闇の中に紛れ込んでしまっていた。熱帯のジャングルが原色の蝶を永劫の時の中に呑み込んで **165** いくように、夜もまたひそやかにスパゲティたちを待ち受けていたのだ。

スパゲティ・ポロネーズ

スパゲティ・バジリコ

スパゲティ・ペシ

スパゲティ・牛タン

スパゲティ・あさりトマト・ソース

スパゲティ・カルボナーラ

にんにく・スパゲティ

そして冷蔵庫の余り物を出鱈目に放り込まれた悲劇的な名もないスパゲティたち。スパゲティたちは蒸気の中に生まれ落ち、川の流れのように一九七一年という時の斜面を下り、そして消えていった。

僕は彼らを悼む。

一九七一年のスパゲティたち。

*

166

三時二十分に電話が鳴った時、僕は畳の床に寝転んでじつと天井を眺めていた。冬の日差しが、ちょうど僕の寝転んだ部分にだけ光のプールを作り上げていた。僕はまるで死んだ蟬のように一九七一年の十二月の光の中に何時間もぼんやりと横たわっていた。

はじめのうち、それは電話のベルには聞こえなかった。空気の層のあいだを遠慮がちにすべり込んできた見覚えのない記憶の断片、そんなところだった。何度か回をかさねるうちに、ようやくそれは電話のベルとしての体裁を帯び始め、最後には百パーセントの電話のベルになった。百パーセントの現実の空気を震わせる百パーセントの電話のベルだ。僕は寝転んだままの姿勢で手を伸ばして受話器を取った。

電話の相手は一人の女の子、とても印象が薄くて、午後の四時半にはどこかに消えてしまふような女の子だった。彼女は僕の知り合いのかつての恋人だった。たいした知り合いではない。どこかで会えば挨拶するといった程度のものだ。もつともらしく見える奇妙な理由が何年か前に彼と彼女を恋人同士にし、同じような理由が何ヵ月前に二人のあいだを引き裂いていた。

「彼が何処にいるのか教えてくれない？」と彼女は言った。

僕は受話器を眺め、電話のコードをずっと目で追ってみた。コードはちゃん168と接続していた。「何故僕に聞くんだ？」

「誰も教えてくれないからよ」と彼女は冷やりとした声で言った。「何処にいるの？」

「知らないんだ」と僕は言った。言つてはみたものの、それはまるで自分の声には聞こえなかった。

彼女は黙り込んだ。

受話器は氷の柱のように冷たくなった。

それから僕のまわりの何もかもが氷の柱に変わっていった。まるでJ・G・バラードのサイエンス・フィクションの場面のように。

「本当に知らないんだ」と僕は言った。「何も言わずにどこかに消えちゃったんだよ」

電話の向う側で彼女が笑った。

「それほど気の利いた男じゃないわよ。わめきちらしてからしか、なんにもできない男だもの」

たしかに彼女の言うとおりであった。それほど気の利いた男じゃない。

でも僕には彼の居場所を教えるわけにはいかなかった。僕が教えたとわかれば今度は彼の方が僕に電話をかけてくるだろう。下らないドタバタはもうこめ169だった。僕は裏庭に深い穴を掘り、全てをそこに埋めてしまったのだ。もう何人にもそれを掘りかえすことはできない。

「悪いけど」と僕は言った。

「あなた、私が嫌いなんですよ？」と突然彼女が言った。どう答えていいのか僕にはわからなかった。そもそも彼女には印象なんて何もなかったからだ。

「悪いけど」と僕は繰り返した。「今スパゲティを茹でるところなんだ」

「うん？」

「スパゲティを茹でてるんだ」

僕は鍋の中に空想の水を入れ、空想のマッチで空想の火を点けた。

「それで？」と彼女は言った。

僕は沸騰した湯に空想のスパゲティの束をそっとすべりこませ、空想の塩をふり、空想のキッチン・タイマーを十五分に合わせた。

「今、手が離せないんだよ。スパゲティが絡んじやうから」

彼女は黙った。

「とても微妙な料理なんだよ」

受話器は僕の手の中で、再び氷点下の坂道を下り始めた。170

「だから、あとでもう一度電話してもらえないかな」

僕はあわててそうつけ加えた。

「スパゲティを茹でてる最中だからね？」と彼女は言った。

「うん、そうなんだ」

「一人で食べるの？」

「そうだよ」

彼女はため息をついた。「でも本当に困ってるのよ」

「役に立てなくて申しわけない」

「お金のこともあるし」

「うん」

「返してほしいのよ」

「悪いけど」

「スパゲティね」

「うん」

彼女は力なく笑った。「さよなら」

「さよなら」と僕も言った。

電話を切った時、床の上の光のプールの光は何センチか移動していた。僕はその171光の中にもう一度身を横たえ、天井を見上げた。

*

永遠に茹でられることなく終わった一束のスパゲティについて考えることは悲しい。

彼女に何もかも教えてやるべきだったのかもしれない、と今では後悔している。どうせ相手はたいした男じゃなかったのだから。画家気取りで下手な抽象画を描き、口だけが達者な空っぽな男だった。それに彼女は本当にお金を返してほしかったのだろう。

彼女はどのようにしているのだろうか？

午後四時半の影に呑み込まれてしまったのだろうか？

デュラム・セモリナ。

イタリアの平野に育った黄金色の麦。

一九七一年に自分たちが輸出していたものが「孤独」だったと知ったら、イタリア人たちはおそらく仰天したことだろう。

コンクリート造りの狭い階段を下りると、その先には長い廊下がまっすぐに続いていった。天井がいやに高いせいか、廊下は干上がった排水溝みたいに見えた。ところどころにとりつけられた蛍光灯はたつぷりとほこりをかぶって黒ずみ、その光はこまかい網でもくぐり抜けてきたように不均一だった。おまけに三本に一本は電球が切れてしまっている。自分の手のひらを眺めるのも一苦労という有様だ。あたりにはもの音ひとつない。運動靴のゴム底がコンクリートを踏む奇妙に平板な音だけが薄暗い廊下に響いていた。

二百メートルか三百メートル、いや一キロは歩いたかもしれない。僕は何も考えずにひたすら歩きつづけた。そこには距離もなければ時間もなかった。そのうちに前に進んでいるという感覚さえなくなってしまう。しかしまあ、とにかく前には進んでいたのだろう。僕は突然T字路のまんなか立っていた。

T字路？

僕は上着のポケットからくしゃくしゃになった葉書を取り出し、ゆっくり読み返してみた。**175**

「廊下をまっすぐ進んで下さい。つきあたりにドアがあります」、葉書にはそう書いてある。僕はつきあたりの壁を注意深く眺めまわしてみたが、そこにはドアの影も形もなかった。かつてドアがあったという痕跡もなければ、これから先ドアがとりつけられそうな見込みもない。それは実にあっさりとしたコンクリートの壁で、コンクリートの壁が本来的に有している特質の他には何ひとつ見るべきものはなかった。形而上学的なドアも、象徴的なドアも、比喩的なドアも、まるで何もない。

やれやれ。

僕はコンクリートの壁にもたれかかって煙草を一本吸った。さて、これからどうすればいいのだろう。先に進んだものか。それともこのまま引き返したのか。

とはいっても、正直なところそれほど真剣に迷ったわけではない。本当のことを言えば、先に進むしか僕には道はなかったのだ。僕は貧乏な生活には十分うんざりしていた。月賦の支払いにも、別れた妻への離婚手当にも、狭いアパートにも、浴室のゴキブリにも、ラッシュユ・アワの地下鉄にも、そんな何もかもにうんざりしていた。そしてこれがやつとみつけたうまい仕事だった。仕事は楽だし、給料は目玉が飛び出るほど良い。年に二回のボーナス、夏の長**176**期休暇。ドアのひとつ、曲がり角のひとつくらいであきらめる手はない。

僕は靴の底で煙草を踏み消してから十円玉を宙に放り上げ、手の甲で受けた。表、そして僕は右側の廊下を進んだ。

廊下は二度右に折れ、一度左に折れ、階段を十段下りて、また右に折れた。空気はコーヒー・ゼリーみたいにかひやりとしていた。僕は金のことを考え、エア・コンデ

インショナーのきいた気持の良いオフィスのことを考え、素敵な女の子のことを考えながら歩き続けた。一枚のドアに辿りつきさえすればそんな何もかもを手にすることができるのだ。

やがて行く手にドアが見えてきた。遠くから見るとそれは使い古しの切手のように見えたが、近づくにつれて少しずつドアの体裁を帯び始め、ついには一枚のドアになった。

ドア、なんとという素晴らしい響きだ。

僕は一度咳払いしてからドアを軽くノックし、一步下がって返事を待った。十五秒たっても返事はない。もう一度、今度は少し強くノックしてまた一步下がる。返事はない。

僕のまわりで空気が少しずつ固まり始めた。

不安に駆られて三度めのノックをしようと足を踏みだしかけたところでドア**177**が音もなく開いた。まるでどこから吹きこんできた風に押されて開いたといったふうなごく自然な開き方だったが、もちろんドアはごく自然に開いたわけではなかった。電灯のスイッチを入れるパチンという音が聞こえ、それから一人の男が僕の前に姿を現わした。

男は二十代の半ばというあたりで、身長は僕より五センチばかり低い。洗ったばかりの髪から水滴をしたたかせ、裸の体をえび茶色のバスローブに包んでいた。足は不自然なほど白く、そして細い。靴のサイズは**22**というあたりだろう。ペン習字の見本帳のようなのっぺりとした顔だちではあったけれど、口もとには人の良さそうな微笑を浮かべていた。

「ごめんよ、風呂に入っていたものだから」

「風呂？」と言ってから僕は反射的に腕時計に目をやった。

「規則なんだ。昼飯のあとには必ず風呂に入らなくちゃいけない」

「なるほど」と僕は言った。

「ところで御用は？」

僕は上着のポケットから例の葉書を取り出し、男に手渡した。男は濡らさぬように指先で葉書をつまみあげ、何回か読み返した。

「五分ほど遅刻しちゃったみたいだけど」と僕は言い訳した。**178**

「ふむふむ」と彼は肯いてから僕に葉書を返した。「ここで働くことになってるんだね」

「そう」と僕は言った。

「俺は何も聞いてないんだけど、とにかくまあ上の人に取り次いでみるよ」

「ありがとう」

「ところで合言葉は？」

「合言葉？」

「合言葉のことは何も聞いてない？」

僕は呆然として首を振った。「何も……」

「それは弱ったな。合言葉がないと誰も通しちゃいけないって上の人にきつく言われてるんだよね」

僕はもう一度葉書をひっぱり出して見たが、やはり合言葉についての記述はなかった。

「きつと書き忘れたんだね」と僕は言った。

「とにかく上の人に取り次いでもらえないかな」

「だから、そのためには合言葉がいるんだよ」彼はそう言つてポケットの煙草を捜そうとしたが、あいにくバスローブにはポケットはなかった。僕は自分の**179** 煙草を一本差しだし、ライターで火を点けてやった。

「悪いな……、それで、何かその……、合言葉らしいものは思い出せない？」

無理な相談だった。合言葉なんて思いつきもしない。僕は首を振った。

「俺もこういうしち面倒臭いことが好きなわけじゃないんだけどさ、まあ上の人には上の人の考えがあるんだろうしね。わかるだろ？」

「わかるよ」

「俺の前にこの仕事やつてたやつもさ、合言葉を忘れたつていう客を一人取り次いだけでクビになっちゃったんだよ。今どき良い仕事は少ないからね」

僕は肯いた。「ねえ、どうだろう、少しだけヒントをもらえないかな？」

男はドアにもたれかかったまま、煙草の煙を宙に吐き出した。「それは禁じられてるんだ」

「ほんの少しでいいんだよ」

「でも、どこかに隠しマイクがあるかもしれない」

「そうかな」

男はしばらく迷つてから、小さい声で僕に耳打ちした。

「いいかい、とても簡単なことばで、水に関係があるんだ。手のひらに入ると、食べることができない」**180**

今度は僕が考えこむ番だった。

「最初のことばは？」

「か」と彼は言った。

「貝がら」と僕は言つてみた。

「違う」と彼は言った。「あとふたつ」

「ふたつ？」

「あと二回間違えたらそれでおしまいだよ。悪いとは思うけど、俺だって危険を冒して規則を破つてやつてるわけだからね」

「感謝してるよ」と僕は言った。「でももう少しヒントがもらえるありがたいな。たとえば何文字のことばだとか……」

「いまにそっくり教えてくれつて言いだすんじゃないのか？」

「まさか」と僕はとぼけた。「ただ文字の数を教えてくれるだけでいいんだよ」

「五文字」と彼はあきらめたように言った。「親父が言つたとおりだよ」

「親父？」

「親父がよく言つてたよ。他人の靴を磨いてやるとその次は靴紐を結ばされる、てや」

「なるほど」と僕は言った。**181**

「とにかく五文字だ」

「水に関係があつて、手のひらに入るけれど食べることはいできない」

「そのとおり」

「かいつぶり」と僕は言った。

「かいつぶりは食えるよ」

「本当に？」

「たぶんね。美味くはないかもしれないけど」と彼は自信なげに言った。「それに手のひらには入らないよ」

「見たことある？」

「いや」と彼は言った。

「かいつぶり」と僕は言い張つた。「手のりかいつぶりはとても不味いから犬も食べない」

「まてよ」と彼は言った。「だいいち合言葉はかいつぶりじゃないんだ」

「でも水に関係があるし、手のひらに入るけど食べることはいできない、それに五文字だ」

「あんたの理屈は間違つてる」

「どこが？」**182**

「だつて合言葉はかいつぶりじゃないんだから」

「じゃあ何だい？」

彼は一瞬絶句した。「それは言えない」

「存在しないからさ」と僕は能力の許す限り冷ややかに言い放つた。「かいつぶり以外に水に関係があつて、手のひらに入るけど食べられない五文字のことばなんてひとつもないよ」

「でもあるんだよ」と彼は泣きそうな声で言った。

「ないよ」

「ある」

「あるという証拠がない」と僕は言った。「それにかいつぶりは全ての条件をみたしているじゃないか」

「でもその……手のりかいつぶりが好きな犬がどこかにいるかもしれない」

「どこにいる？ そしてどんな犬だい？」

「うーん」と彼は唸つた。

「僕は犬のことならなんでも知つてるけど、手のりかいつぶりが好きな犬なんて見たこともない」

「そんなに不味いのかい？」**184**

「おそろしく不味い」

「あんたは食べたことある？」

「ないよ。そんなに不味いものをどうして食べなくちゃいけないんだ？」

「そりやまあそうだな」

「とにかく上の人に取り次いでくれないかな」と僕はきつぱりと言つた。「かいつぶり」

「しかたないな」と彼は言った。「一応取り次いでみるよ。無理だとは思うけどさ」

「ありがとう。恩にきるよ」と僕は言った。

「でも手のりかいつぶりなんて本当にいるのかい？」

「いるさ」

手のりかいつぶりはビロードの布で眼鏡のレンズを拭き、ため息をついた。右下の奥歯がしくしくと痛んだ。

歯医者か、と彼は思う。もううんざりだ。歯医者、確定申告、車の月賦、エア・コンデイショナーの故障……。彼は皮ばりのアームチェアの背もたれに頭をもたせかけ、死について思いめぐらしてみた。死は海の底のように静かだった。185

手のりかいつぶりにここに眠る。

その時インタフォンのブザーが鳴った。

「なんだ？」と手のりかいつぶりは機械にむけてどなった。

「お客です」と門番の声がした。

手のりかいつぶりは腕時計を眺めた。「十五分の遅刻」